

# 感情とシンボルの合一：Keatsの「詩」の構想

虹林桃子

## はじめに

John Keatsが1819年に手掛けたオード群の中の2編「ナイチンゲールに寄せるオード」(“Ode to a Nightingale”)と「ギリシャの壺のオード」(“Ode on a Grecian Urn”)には、詩人が想像力で思い描くナイチンゲールとギリシャの壺が、芸術のシンボルとして登場する。それらのオードにおいて特徴的なのは、ナイチンゲールの歌声“self-same song”(65)とギリシャの壺から聴こえてくる音のない演奏“ditties of no tone”(14)である。これらの音楽は詩人が理想世界へ喜びを感じる際に現れる。そして、詩人がその世界の中で芸術のシンボルと合一した後、悲しみを感じて現実に戻る際に消失する。本発表では、現実の詩人の感情と理想美である芸術のシンボルとの合一に音楽が欠かせない役割を果たしていることを考察した。

## 1. 1818年以降の詩作品

Keatsの詩想は、1818年以前とそれ以降の時期で変化している。1818年以降の詩作品にはKeatsの芸術の美への愛だけでなく、哲学的な思索も顕著に加わり、現実を積極的に詩作に取り込む工夫が見られるからである(A. W. Crawford 479)。この変化は、John Taylor宛の手紙に認めることができる。手紙の中でKeatsは、“an exquisite sense of the luxurious”「贅沢なものの繊細な感覚」を追求するのではなく、“a love for Philosophy”「哲学への愛」に魂を向け、現実を受け止めることの重要性を説く(117)。さらには、その数週間後の手紙に示された思想、“a large Mansion of Many Apartments”「多室の館」にも表れており、そこでKeatsは人間の精神的成長が“the infant or thoughtless Chamber”「無思想の部屋」から理想美を楽しむ“the Chamber of Maiden-Thought”「処女思想の部屋」へと続くことを述べている(124)。最終的に現実という善悪も分からない霧の中に至るこの部屋の比喩はまさに、Keatsの心境が理想を追い求めるものから現実を受け止めるものへと変化したことを示している。

## 2. 「ナイチンゲールに寄せるオード」

「ナイチンゲールに寄せるオード」は三部構成からなる。第1～3連では、語り手である詩人がナイチンゲールの歌声によって現実から理想世界にある芸術のシンボルに接近していく様子、第4～6連では詩人が芸術のシンボルと合一する様子、第7、8連では詩人が理想世界から現実に戻る様子がそれぞれ描かれている。

第1連でナイチンゲールの歌声は苦痛を味わう詩人に安らぎをもたらす。活力の源であるかのように夏を謳歌する鳥の音楽は、詩人の気持ちを高揚させ、幸福にする。また第2連でその歌声はワインに喩えられる。詩人はヒポクレネに喩えられるワインを飲み、詩的靈感を授かることを想像するが、このとき“warm South”(15)と描かれるワインは、“[s]ingest of summer”(10)と描かれていたナイチンゲールの音楽と同じ夏のような活力を宿しているのである。このワインの描写は、詩人が鳥の音楽から得ている詩的靈感の比喩となっており、芸術のシンボルに合一していく最初の段階であると考えることができる。詩的靈感を得た詩人は、次第に理想世界の核心である芸術のシンボルへと続く仄暗い森の奥へと入っていく。第3連の“[f]ade”「徐々に消えていく」や“dissolve”「溶けていく」(21)という言葉は、詩人の感情が徐々に芸術のシンボルと合一する経過を示している。ナイチンゲールの音楽の重要性は、鳥の実体が描かれず、木の妖精に喩えられるのみである点において強調される。

ナイチンゲールの音楽である“Poesy”「詩的靈感」(33)に導かれる詩人の意識は、“dull”(34)という言葉に表れる通り、第4連で朦朧としてくる。第1連の“dull opiate”(3)と照らし合わせると、この段階で詩人は肉体的な感覚を失いつつあることが分かる。辺りが完全な暗闇となったとき、詩人は視覚を制限される。肉体的な感覚を失う中で、詩人は芸術のシンボルと徐々に合一していくのである。暗闇は第5連でも続き、詩人は視覚が制限された中でナイチンゲールとともに取り残される。“Darkling, I listen”(51)で始まる第6連で、詩人は芸術のシンボルと完全に合一していることを実感する。詩人の視覚が制限され、聴覚だけが働くこの場面において、鳥の歌声は「魂を注ぎだす」(57)と表現され、再びワインに喩えられる。ナイチンゲールの音楽に酔いしれる詩人は鳥と歓喜を共有し、合一は完成するのである。この理想世界に没入し、詩的靈感が高まった状態は、Keatsにとって詩が誕生する瞬間である。しかしながら、詩人は「私の耳はむだになるだろう。おまえの気高き挽歌によって土くねになっているだろう」(59-60)と述べ、芸術のシンボルとの永続的な合一が死すべき人間にとって不可能であることを認識し、現実に戻る悲哀を感じることとなる。

第7連で詩人はナイチンゲールを「不死の鳥」(61)と呼ぶ。鳥の音楽“self-same song”(65)は何世紀にも渡って響いているものであり、“alien corn”「異郷の麦畑」(67)で涙を流すルツをなぐさめたものなのである。この“alien”

という言葉には人間の感情と芸術のシンボルとの合一が永続しないことが、故郷を恋しがるルツの描写には詩人が人間としての生に執着する様子が示唆されている。第8連で詩人は現実の自己に戻り、ナイチンゲールの音楽は消失する。人間とナイチンゲールの違いを認識した詩人は、“[f]orlorn”「孤独でわびしい」(71) 気持ちになり、今までの歓喜は悲しみへと変わる。これに対応するようにナイチンゲールの歌声は “plaintive anthem” 「もの悲しい聖歌」(75) と表現される。これは第6連の “high requiem” 「気高き挽歌」(60) と対になっており、芸術のシンボルと永続的に合一できない詩人の悲しみが表れている。また同時に “anthem” はナイチンゲールの音楽への称賛、そして人間としての生を選びとった詩人自身の矜持を暗示しているのである。

### 3. 「ギリシャの壺のオード」

「ナイチンゲールに寄せるオード」と同様、「ギリシャの壺のオード」も三部構成からなる。第1連では、詩人が理想美である芸術のシンボルに惹かれて行く様子、第2、3連では詩人の感情が理想世界で芸術のシンボルと合一する様子、第4、5連では詩人が理想世界から現実に戻る様子がそれぞれ描かれる。

第1連で詩人は静寂と長い時間によって養われた壺を擬人化するとともに、音楽的な物語と春の温かな活気を内に宿すものとして描写する。これは、壺の表面に施された彫刻から奏でられる音楽に惹き寄せられた、詩人の詩的靈感によって表現されている。ナイチンゲールの音楽に歓喜を感じて芸術のシンボルと合一したように、詩人は壺の音楽に思いを馳せ、芸術のシンボルと一体化していく。

詩的靈感によって詩人は、第2連で聴こえないはずの笛と小太鼓の音色を “sweet” 「甘美な」(11) ものとして聴く。それは詩人の耳にあたかも聴こえているかのように「耳に聞こえるメロディに増して、聞こえないメロディは甘美なものである」(11-12) と描写される。ナイチンゲールの魂を注いだ音楽が、詩人の耳を土くれに変えるものであったように、この甘美な音楽 “ditties of no tone” (14) も人間の肉体的な感覚を超え魂に訴えかけるものとして表現されている。詩人の喜びは第3連で6回繰り返される “happy” (21, 23, 25) という語に集約され、強調される。しかしナイチンゲールの不死性を悟った時と同様、詩人は壺の音楽とその内なる活気に喜びを見出しつつも、次第に人間としての生に執着することとなる。詩人は壺の彫刻を生きた人間の情熱にはるかに勝るものの、結局は人間と異なる存在として描き、現実世界を恋しがるのである。

生贄の行列に人々が参加する様子を描く第4連で、詩人は町の静寂を “emptied” (37) や “desolate” (40) と表現し、人間とは異なる芸術のシンボルと永続的に合一することの孤独を描く。この時、「ナイチンゲールに寄せるオード」のルツのように、詩人は人間としての現実の生に思いを馳せ、魂に響いていたはずの音楽は消失する。第5連で詩人は壺を客観的に観察し、“Cold pastoral!” (45) と呼びかけるが、この “[c]old” に、感情と芸術のシンボルが永続的に合一できない悲しみが表れていると言えるだろう。また “pastoral” という言葉には、ナイチンゲール同様、詩人に詩的靈感を受ける壺の悠久の音楽が示されていると考えられる。詩人の感情を現実から理想世界へと導く音楽は、同時に人間を生に回帰させるものでもある。Keatsはこの人間の現実と理想の狭間において響き渡る音楽の悲喜交々を、詩の誕生として描いたのである。

### 結論

Keatsの2編のオードに描かれる音楽は、理想美に思いを馳せる現実の詩人の感情を芸術のシンボルに合一させる役割を果たしており、合一の状態から詩人が現実の自己に戻る際に消失する。音楽は詩人の人間的感情を昇華し、詩を生み出すための詩的靈感として描かれるが、それは永続的に響き続けることはない。なぜなら、人間にとって芸術のシンボルとの合一は現実における自己の死を意味するからである。このように、1818年以降、現実を直視するようになったKeatsの詩想の変化は、詩人を理想世界へ導く際に現れ、詩人が現実に戻る際に消失する音楽に反映されていると言えよう。

### 引用文献

Crawford, A. W. “Keats’s Ode to the Nightingale.” *Modern Language Notes*, vol. 37, no. 8, 1922.

Keats, John. *The Poems of John Keats*, edited by Miriam Allott, Longman, 1970.

---. *Selected Letters of John Keats: Revised Edition*, edited by Grant F. Scott, Harvard UP, 2005.

### 参考文献

Abrams, M. H. *The Mirror and the Lamp: Romantic Theory and the Critical Tradition*. Oxford UP, 1971.

Brooks, Cleanth. *The Well Wrought Urn: Studies in the Structure of Poetry*. Dennis Dobson Ltd, 1960.

Gérard, Albert. “Romance and Reality: Continuity and Growth in Keats’s View of Art.” *Keats-Shelley Journal*, vol. 11, 1962.